

前回の RoW

Baba Yaga の呪いにより Artifact である「小屋」を手に入れねばならなくなった一行は、「小屋」が安置されていると目される Irisen の首都，White Throne に潜入することになった．
しかし，White Throne 内である程度自由に行動するには身分証がいる．
そのため，White Throne 内でも比較的警備が緩い Howling District に住む偽造職人 Morti に会いに行くことになった．

狼と人頭税

Fisher Camp で Nadya の義理の叔父，Lingeel に力を借りて，Howling District に潜入する．
Howling District は Winter Wolf 達の居住地で，わりと適度な空気らしい．
White Throne を取り巻く城郭も Howling District のところでは途切れていて，門番はいるものの通ることはできるようになっていた．

考えた末，一行は Winter Wolf とその奴隷一行という体で潜入することを決めた．
人間形態の Winter Wolf に変身できる毛皮(Rimepelt)は Bluff がパーティで一番高い(なんと6もある！) Helvetica が着て行くことになった．
比較的警備のゆるい地域とはいえ，奴隷が長物を持って出歩く訳にはいかない．武器は魚の樽に詰めることにした．
なお，Nass の大型バツソはこの先の戦いについて来れそうになかったのでおいていくことになった．

Howling District の入り口が近づき，遠目に門番が見えてくると，Helvetica は Rimepelt を起動して獣耳を生やした．
魚を満載した樽はワゴンに乗せ，それを Kirisikka たちが伏し目がちに押す．
Helvetica は「さぁキリキリ働けー」とワゴンの上でふんぞり返る．

暴君とその下僕達が城壁の裂け目に差し掛かると，Great Axe を担いだ門番の女が話しかけてきた．
その髪は銀色で肌は透けるように白く，女が Winter wolf であることを如実に示していた．

門番は Helvetica に近づくと匂いをかぎ，

「よう姉妹！よく来たな！何だそれ魚か？」

わりとフレンドリーに接してきた．おそらく大丈夫ではあろうが，なんとか言い繕っておいたほうがよいだろう．

「妾は魚が好きでな、その辺の Fisher Camp で買ってきたのじゃ。さぁお主ら、運べ運べーい(Bluff 16)」

「そうなのか！私は肉の方が好きだな！あと人間をいっぱい街に入れるとお金がかかるよ」

人頭税を取られた。

金で解決すればマシだと思いながら最初の関門を突破した一向に後ろから声が掛かる。
もしかバレたか？と焦る Helvetica だが

「あんたよく見たら結構いい女だな！私は Greta ってんだ！これから遊ぼう！」

「いや、お主仕事は」

「飽きた」

「交代までもうちょっと頑張りなさい」

門番がちょっと Chaotic なだけだった。

僕は威厳が少ない

街には入れたものの、まずはワゴンをどうにかしないといけない。

Lingeel が言うには、いつも魚を持っていく魚屋があるらしい。なので、そこに魚を置いてから Morti の家に行こうということになった。

さっきの門番はちょっと危なかった、と囁き交わしながら魚のワゴンを押していくと、曲がり角で甲高い声とともに小柄な影が屋根に踊った。

「ヒャッハー！新鮮な魚だ！置いてけー！」

ゴブリンの群れであった。Winter Wolf という体の Helvetica はためらいなく抜刀するが、その使用者で非武装ということになっている他のメンバーは武器を抜けない。

思わぬピンチ、こんな時に頼りになるのが徒手空拳で戦う Kirsikka、呪文の使える Arl Diana Nass、Sputnika.....全員戦えた。

とは言え、一方的に高所から矢を射かけられ、攻撃的な呪文をどこまで使っていいかという交戦規定が定まらないことによって、

ゴブリン相手に意外とグダグダしそうな予感が漂いだした。

Helvetica は

「無礼者！」

と声を荒らげたものの、ちょっと迫力にかけていた。
その時、もっとドスの利いた大声がひびき、ゴブリンたちは逃げ出していった。
そして声の主は Helvetica にフレンドリーに話しかける。

「なああんた！もうちょっと迫力とか大事だぞ！」

うわぁ、面倒くさいことになった。

Greta が言うには、この街はこういうゴロツキに加えて Ice Troll や Mirror Man がいるから気をつけるとのこと。

そして、Ice Troll は Winter Guard であり、揉め事を起こすと面倒になるので、殺った時は速やかに死体を隠すといひよ、という有り難いアドバイスも頂いた

Greta は仕事が終わったからと Helvetica を誘ってきたが、仕事があるということにしてなんとかその場を切り抜けることができた。

ところで、Mirror Man ってなんだろう？手鏡でスカートの中身を覗く人のこと？

ミラーマン

無事に魚屋に魚を届けられるのか、気を抜けない、と思いながら魚屋に向かう橋に差し掛かると向こうから見慣れぬ人影が音もなく近づいてきた。

Lingeel が袖を引いた。

「あれが Mirror Man だ。気をつける」

近づいてくる人影のフードが風に煽られて中身があらわになる。そこに顔はなく、のっぺりとした鏡がその位置を占めていた。

Diana のお師匠様によると、魔女が鏡越しに街中を監視するために創りだした魔法生物であるとのこと。なるほど合理的な設計であった。

Helvetica はワゴンを降り、皆とともにワゴンを道脇に寄せる。そのまま黙礼してすれ違う。
Mirror Man は周囲に鏡を向けながら、すれ違い、去っていった。

なんとか辿り着いた魚屋で Lingeel が魚を引き渡すと、店主は今年は厳しいというようなことを言っていた。
樽底からは武器が出てきたが、Lingeel が指を一本口の前に立てると、多少怯えた顔をしながらも店主は口をつぐんだ。

ワゴンも置いたし、あとは Morti の家に向かえばよい。
Helvetica を先頭に一行が通りに差し掛かると、突然声をかけられた。

そこは酒場の軒先、この厳冬期にありながら、半袖でカードバトルに興じる二人の男。
もちろん寒さが気にならないのは男たちが Winter Wolf だからであり、傍から見てもわかるくらいにベロンベロンだったからでもあった。

「おいそこのお前、酒のめや！」
「俺達とデュエルしようぜ！」

Helvetica は「急いでるんですけど」って言ったけれど酔っぱらいには話が通じない。

「兄弟、妾の負けでよいからこれで一杯やるといい」

根負けした Helvetica は、プラチナ貨を二枚投げつけた。

トラブル・アフター・トラブル

乱痴気騒ぎの現場から数十フィート進んだあたりで、またも揉め事は起きた。

「そこの方、お助けください！ご主人様が大変お怒りで」

逃げてくるのはみすばらしい格好をして酷く憔悴した Ulfen 人の男。
一行の後ろに逃げ込んだ男を追うかのように、通りの向こうから筋骨隆々とした Winter Wolf が姿を現した。

Winter Wolf は Ulfen 人の男に目を留め、それをかばうように立つ Helvetica に威圧的に話しかけた。

「何だお前？」

「なんだか穏やかでないと思うてな．この奴隷をどうするつもりだ」

「狩りをするのさ．逃していたぶって殺す．楽しいぞ？」

「ふむ，そうか，なるほどそいつは面白そうだ．妾も試したくなった．
　　のうお主，この奴隷，売ってはくれんか」

相場より高い値段をふっかけられたが，目的を聞いてしまった以上後には引けない．
義を見てせざるは勇なきなり．Order の Edict にもそう書いてあるんですけど！ Challenge できなくなると困るんですけど！

奥歯を噛み締めながらがま口を開き，Helvetica はプラチナ貨を 15 枚ほど払って，哀れな Ulfen 人を身請けしたのであった（この Ulfen 人は Lingeel が魚屋に連れて行き，魚屋で匿ってもらうことになった）．

トラブル・アフター・トラブル・アフター・トラブル

これで新しい奴隷が買える，と上機嫌で去っていく Winter Wolf に皆が無力を噛み締めながら，一行はさらに数十フィート歩いた．

Morti の家に近づいた頃，太く低い声が辻の横から聞こえてきた．

「ハラ減ったなあ」

「あの犬うまそうだな」

2 体の Winter Guard.....Ice Troll が Sputnika の乗る犬に目を留めたようだった．
Sputnika の犬は Lingeel が手塩にかけて育てた，名犬である．あまりにも名犬なので HD が多い．それをスナック感覚で取って食われてはシャレにならない．

早足で道を進み，Winter Guard からの視線を切ると即座に Obscuring Mist を Sputnika が張った．そしてそのままダッシュで Morti の家にレディゴー．

なんとか Morti の家に辿り着き扉を開けようとするも鍵がかかっている．
まあそんなことだろうと思ったよ！．

Lingeel が激しく戸を叩いて Morti を呼ばわるも返事はなし．後ろからは，あれ，犬どこいった？との声．

Nass が急いで解錠しようとするが，寒さで手がかじかんでいるのもあってか成功しない．

Arl が苦虫を噛み潰したような顔で懐から Knock の Scroll を取り出して唱えると、扉が開いた。一行は Morti の家に雪崩れ込み、すぐに戸を閉ざした。

Morti は目を丸くして死ぬほど驚いていた。

新しい顔よ！

Lingeel が事情を話すと、Morti は快く身分証の偽造に協力を申し出てくれた。

6人分ともなると半日はかかってしまうため、一行はすっかり手狭になった Morti の家に泊まることになった。

ランプの明かりの中で細々とした身分証の偽造をしながら、Morti は現状やこの稼業に手を染めた理由を語ってくれた。

Morti はかつて Winter Witch に拉致され、拷問を受けたことがあり。釈放されて以来、こういった活動に従事しているということだった。

翌朝になると、6人分の Stilyagi としての身分証ができていた。

Stilyagi は Winter Witch たちの私兵であり、その身分証を手に入れば White Throne の他の地区への立ち入りのみならず、ある程度のフリーハンドが手に入る。

一行にとってはまたとないカヴァーだった。

そして Lingeel は一行に問うた。その身分証を使って White Throne で何をするつもりなのかと。

一行はすべてを明かしたわけではなく、White Throne にある大切な物を手に入れるのだ、と伝えただけだった。

しかし、Lingeel は大切な物が何かということに概ね見当がついたらしく、あまり教えたくないが、つてがある、と言っていた。

アイドル禁止

Rimepelt を起動して心機一転、Helvetica と一行が Morti の家を出て Howling District から White Throne 中央区への門に向かおうとすると、フレンドリーな声がした。

「おはよう！どこいくの？」

Greta、また君か。

「そうは言うが、お主仕事は？」

「辞めたよ！仕事してたら遊べないじゃん！」

ダメな人だった。

「実は主人に急に呼び戻されてな、遊びたいのはやまやまだが、勤め人はつらいものよ」

「じゃあ私も行くよ！職ないし！雇ってもらえるかも！」

押しが強い。強すぎる。言葉に窮する Helvetica にそっと Diana が耳打ちする。

「こういう時は、主人は嫉妬深いといえいいんですよ」

だいたいその通りのことを言って Helvetica が煙に巻くと Greta は残念そうな顔をして見送ってくれた。

それこそ人間をいたぶって喜ぶような邪悪な Winter Wolf とは違って気のいいやつであったが、Greta が好いているのは Winter Wolf の格好をした Helvetica であって、人間の Helvetica ではない。

一緒に歩むことはできないのだった。

Greta と別れて門に向かい、いよいよ中央市街へと向かう。

さすがに警備が厳しい。Greta のような適当な門番ではなく、Mirror Man が2体である。

Mirror Man は一行の身分証に目を通す。悟られまいとするがやはり緊張で汗がにじむ。

長い一瞬の後、Mirror Man は通行を許可した。Morti の偽造の腕はホンモノだった。

跳ね橋を渡る一行の頭に、Mirror Man からの Telepathy が届く。

「ようこそ市民、公共の場での舞踏は禁じられております (Public dancing remains strictly prohibited.)」

説明します！

White Throne は緊張した雰囲気にもまれていた。あちこちで衛兵が歩きまわり家々は窓を閉ざしていた。

Lingeel に案内され、Milani の神殿に行く。

教誨段の裏から地下に降りると、そこは Winter Witch の支配に対抗する組織、Herald of Summer Return のアジトだった。

一行は Solveig という司祭におおまかな事情を話し、説明を受けた。

Solveig の解説した内容

「小屋」が安置されている Market Square はいかなる魔術が森のようになっている。
現在、Market Square を支配してるのは因縁深き Nazena である。
Market Square は極めて警備が厳しい状態であり、全市的な騒擾でも起きない限りは近づけそうにない。

Herald of Summer Return は Winter Witch による統治にダメージを与えるため、
White Throne での反乱を計画しているが、戦力が不足している。
このため、協調可能な戦力として Iron Guard の名が上がった。

今の Witch Queen が Baba Yaga に対してクーデタを起こした時、
Baba Yaga 直屬部隊である Iron Guard は放逐され、Winter Guard に取って代わられた。
Iron Guard の残党は Winter Guard に一矢報いたいと思っており、
敵の敵は味方ということで Herald of Summer Return とも接近している。

しかし、所詮は敵の敵であり、Herald と Iron Guard は相互の信頼関係を築けてはいない。
Iron Guard は来るべき反乱の日を決起する条件として、
「Herald が Winter Guard の重鎮 Logrivich を暗殺すること」という条件をつけた。

ということで、「小屋」を手に入れたい一行と、決起を望む Herald of Summer Return、Iron Guard は辛くも利害の一致を見た。

おのれ Logrivich！首を洗って待っている！

ザ・脳筋

数日の猶予の後、Herald of Summer Return の決起は行われることとなった。

一行は Cure Wand を買い占め、武器を研いでその日を待った。

そして運命の日、Logrivich の住まう時計塔に向かおうとした一行に、Solveig は3つのことを告げた。

ひとつは Solveig の元恋人である Bella が Logrivich にとらわれて救出してほしいこと、

ひとつは Logrivich を暗殺した暁には時計塔の屋上から花火を上げてほしいこと

そして Howling District で狩りの獲物にされそうなところを救った Ulfen 人から謝礼を言付かっていること

いよいよと心に拍車を入れ、一行は時計塔に向かった。

時計塔は一段と高くそびえ、機械仕掛の動作する低い音が周囲に響いていた。

入り口のフェンスは閉まっていたようだが、周囲を見渡して飛び越える。

庭にあったカリアティードが襲いかかってきたがこれを撃退し、建物の中に入った。

Logrivich は Winter guard の重鎮ということもあって室内には Wintar Guard の Ice Troll が何体も生活していた。

無論、膂力に優れた強敵であるが、数で圧倒し炎を使えば倒すことは難しくない。各個撃破にて次々と倒していった。

そして台所で大柄な Ice Troll を倒し、Bone Picker という生き物を捕虜にした。捕虜にしたからには Kirsikka がインタビューする。

「Logrivich はどんなやつだ、言え！」

「お前らそんなことも知らないのかよ。Logrivich 様は白くて首が長いんだぜ」

マジ？

っていうかなんでそんなことも知らずにカチコミしてるんだらうね私ら。でも Large じゃないみたいだよ？

あと、台所の脇に食料庫というところがあって、子どもたちが囚われていたので救出した。何人かはすでに料理されてしまっていたが、救える命を救えたことを救いと思うほかはない。Ice troll に対する怒りを新たに時計塔の 2F へと向かった。

クソッ！魔女のバアさんの呪いか！

Bone Picker の吐いた情報によると 2F には「クソババア」がいるらしい。

Bella のこともクソババアの客人かもしれないと言っていたので、それらしい部屋を見つけて襲撃。

部屋にいたのは大釜をかき回す魔女と、その下僕の小さな人形、そして可動式のストーブだった。

- ・ 魔女
 - ・ おばあちゃん
 - ・ 4th まで出る
 - ・ Confusion と Lightning Bolt、あと Slumber を使ってきた
- ・ ストーブ
 - ・ 炎の付いた手で殴ってくる
 - ・ 殴った跡に掴んでストーブの中突っ込んでくる (Swallow whole)

- ・ Hardness がある
 - ・ Swallow whole の胃袋にもあるのが地味に酷い
- ・ 人形型アンデッド
 - ・ 殴られると声を盗まれる．声を盗まれると呪文が唱えられなくなる．
 - ・ 殴られると息を盗まれる．息を盗まれると窒息に陥る

非常な強敵だった．Arl の Pyrotechnics で分断してからの戦闘を挑んだが，Arl と Diana がまとめて声を奪われて無効化され Helvetica はストーブに頭を突っ込んだ状態で意識不明の重体に陥った

なんとか Kirsikka が Diehard に立ち回り ,リソースの多くを消費してかろうじて打倒することができた．

しかし，戦いはまだ終わらない．

Logrivich が控えているのはもちろん ,その後は混乱の中を Market Square まで駆け抜け ,「小屋」の奪取をせねばならない．

どうすんのこれ

(次回に続く)

ボーナス経験点

名前	経験点
<u>Helvetica</u>	1.0
<u>Nass</u>	0.3
<u>Arl</u>	0.3
<u>Diana</u>	0.3
<u>Kirsikka</u>	0.2
<u>Sputnika</u>	0.2